

独りよがりでは何も成立しない。
住む人、建てる人、設計する人が
一体感をもった家づくりを目指している。

ジェイ・ハウス 山崎直樹氏「四一歳」

譜面どおりに弾けば正解、じゃないという点で
音楽と建築の仕事は似ているかもしれない。

取材撮影/坂口紀美子



「もう20年以上、誰にも見せたことないんですよ」。照れくささと懐かしさをないませにした表情で手渡された一枚の写真。無心にギターを奏する一七歳の山崎さんが写っている。とにかく上手く弾けるようになりたい、の一心でした。今思うと、このころが一番楽しかったかもしれませんね。

ジョー・サンブルら、好きなアーティストのライブには遠方へも足を伸ばす。「目の前の奏者と一緒にリズムをとると、テンションが上がります。リフレッシュする瞬間です」。まさにNOMUSICNOLIFE! 身も心も、根っからの音楽好きである。

になると音楽仲間が一気に増え、自宅に集まって練習をした。工務店を営み建材加工の音が鳴り響く実家は、格好の練習場だった。高校一年の時、先輩に誘われてステージへ。初めて受けた拍手と歓声、演奏し終えた高揚感に魅了されました」と振り返る。

ト売りまですべて自分たちで行った。ホールの定員は六〇〇名。高校生バンドが開くには大きすぎる広さだ。「何度か練習場に遊びに行ったのですが、その真剣さに驚いたんですよ」と、同級生の妻美砂子さんが懐かしむ。一フレーズごとに、「ドラム走りすぎ!」「音色が違う!」と演奏を止めては語り合い、時には喧嘩をし、練習が全然進まなかったのだぞうだ。でも、本番にはフロアいっぱい観客が集まっていた。みんなこのこだわりを聴きに来てるのかなって感心したん

です」。結局、ライブの赤字は一度も出さなかった。

当時使っていたギターはいま、事務所の特等席に置いてある。ときどき奏では、あのころを思い出す。「楽器って、譜面通りに弾けば正解、じゃないんですよね。メンバー全員の音と呼吸を合わせて、そこに一体感が生まれる瞬間を目指してきた。」その点では、音楽と建築の仕事は似ているかもしれない。図面をひく自分だけでなく、建てる人がいて住む人がいて。その一体感があって初めてよかった、と言える。独りよがりでは何も成立しない。多くのことを音楽から学びました。

山崎さんと音楽とのいい関係は、これからもずっと続いてゆくのだろう。



山崎直樹(長崎県佐世保市)
1969年長崎県生まれ
1991年有限会社ジェイ・ハウス共同設立



- ①「最近、「音楽室のある家を作りたい」というお客さんとの出会いがありました。音楽好き真利に尽きます」と話す山崎さん。
- ② 妻はピアノ、高1の娘はバンド部員という音楽一家は、愛車でドライブにも音楽が欠かせない。「もしも娘がプロ奏者になったら、世界中ついでまわりたいですね」と話す。
- ③ CDとLPレコードのコレクションは200枚近くにのぼる。
- ④ 事務所に飾られたギター。当時のメンバーの一人は、長崎を中心に活動する有名アマチュアバンド「赤崎コンバ大学」のドラマーだ。
- ⑤ 高2の春、ライブでの1ショット。久しぶりに見た感想は、「ほ、細い…」だったそう。